

## 2014 USA Surrogacy Conference in San Francisco

仙波由加里

2014年3月15日、サンフランシスコの Fort Mason Center にて、第一回 USA Surrogacy Conference が開催された。9時から18時まで、代理懐胎にかかわる様々な立場の人たちからの講演があり、日本では得ることのできない非常に貴重な情報を得ることができた。

会議には代理懐胎の利用を検討している人、実際に代理懐胎で子どもを持った人、代理出産で生まれた人をはじめ、代理出産のコーディネイト組織 (Agency) の関係者、弁護士や心理カウンセラーなどの専門家も参加していた。会場内の座席は全部で96席、そのうち9割は埋まっており、そのほかに、エイジェンシーのブースにいる人やスタッフなどを含めると、100名を超える人が参加していた。参加者を見て特に印象深かったのが、現在、代理懐胎の利用を希望して参加している当事者の半分以上がゲイカップルだったことだ。したがって、代理懐胎をメインとした会議ではあったが、卵子提供の利用も関連してくるために、卵子提供に関するディスカッションについても時間が割かれていた。以下、全体の内容を簡単に報告する。

第一セッションでは、クリニックの選択と代理出産の費用について、Sam Everingham が司会者となり、3人の代理出産を介して子どもを持った親 (うち2人が男性、一人が女性) がパネリストとなって討論された。司会者の Sam 自身もゲイで、代理母を介して子どもをもった父親である。彼は2010年の非営利の代理出産利用者組織 Surrogacy Australia を設立、各種の関係者と協力して、会議やオンライン情報を通して、より質のよい代理懐胎の実施のための活動を続けている。

パネリストで、最初に自分の経験を語ったのは Jerry Mahoney で、彼はゲイであり、アメリカで代理母エイジェンシーを利用し、代理母を介して子どもを持った。彼は“Mommy Man” (jerry-mahoney.com) というブログを立ちあげている。彼は、代理懐胎のプロセスのためにトラスト (個人の信託) を作った経験などについて語り、トラストをつくる利点について、かかる費用について透明性を保つことができると話していた。またアメリカで技術を受けたほうが、文化的な違いもないし、海外での技術を受けるよりもいいというのが彼の持論だった。インターネットの情報は必ずしも正しくないことがよくあり、エイジェンシーを選択する中で大事なのは、自分がじかに代理母やエイジェンシーの人、ファシリテータと十分に話せる環境かどうかだと言った。海外で技術を受ける場合、それが不可能になるので、国内で技術を受けるほうがいいと話していた。

2人目のパネリストは、Susan Helmrich で、21歳のときに癌になり、そのために、彼女自身妊娠することは無理なため、代理母に妊娠出産を依頼した。彼女のパートナーは男性であり、二人は米国で人工授精型代理出産 (traditional surrogacy) を利用して、2人の子どもを持つことができた。二回とも、同じ女性が代理母となってくれた。代理母の選択について、代理母と会える環境の大事さについて話していた。彼女の家族は代理母と現在も会うことがあるという。

3人目のパネリスト、Jason Howe は、インドで代理母に出産してもらったが、彼らは代理母とは連絡をとっていないという。インドで代理母を依頼した理由は、米国での代理出産にかか

る費用が高いためだった。彼らは幸いにして一回目の体外受精で双子が生まれた。Jason は代理出産にかかる費用について、アメリカで受ける場合に一番負担になるのは、代理母のための保険料だと言っていた。もし代理母に問題が起こった場合に、アメリカでは医療費が高く、個人ではその医療費が払いきれない可能性がある。そのために代理母にかける保険もあるが、その保険料が非常に高く、彼らにはかなりの負担だったために、インドでの代理出産を考えたという。もしインドならば、代理母に何か問題があっても、彼らが代理母の医療費を負担できると考えたらしい。米国では医療費のみならず、保険料の高さが、米国の **intended parents** の **fertility tourism** の理由の一つになっている可能性がある。

3人のパネリストのディスカッションの中で特に注目したいのは、代理母の負担を減らすといった発言が繰り返しだされていたことだった。彼らの口から、移植数は抑える必要があり、そのためには凍結技術が大事であること、また妊娠後の問題をおさえるためにも、胚の選択として **PGD** や **PGE** など **embryo biopsy** の利用が重要であること、そして、ときには代理母の安全のために減数手術も必要だと言う意見が印象的だった。

ゲイの **Jerry** に対しては、会場から「親がゲイと言うことで子どもは差別をうけたりしていないのか」という質問があったが、**LA** や **SF** のようなところでは、すでにゲイやレズビアンに対する偏見や差別は少なく、子どももそれでいじめを受けたことはないと思うと答えていた。**Jerry** にとっては、子どもと一緒にいると、自分と似ているので、誰もが自分たちを血のつながった親子と見てくれるので、それが自分にとっては重要だと話していた。

第二セッションと第三セッションは、産婦人科医によるプレゼンテーションだった。第二セッションでは、**Dr. Said Daneshmand** が代理母の負担を極力減らすために、事前検査でいかに代理母候補者の体質を見極め（糖尿病や妊娠中毒症、高血圧になりやすい体質ではないかなど）ることが大事かについて説明し、また胚の移植数を減らすことの重要性と、そのためには胚凍結の利用が不可欠であるという話をした。彼のクリニック **Fertility Center of Las Vegas** では代理母が妊娠した後も **24** 時間栄養士が妊婦の栄養管理を行うなど、代理母の健康上のサポート力をいれているという。さらに **PGD** などを利用して、よい質の胚を選択することも必要であるといい、彼のクリニックではこうした **PGD** なども代理出産にかかる医療費としてパッケージになっているとのことだった。卵子だけでなく、最近では精子の質も問題になっていて、**45** 歳以上の男性の精子を使うと自閉症の確率が高くなるという報告もあるので、その点についても、男性にはきちんと話をしているといった。

第三セッションは、**Dr. Guy Ringler** のプレゼンテーションで、成功率とは何を指すのかと言うことに触れ、科学的な妊娠を成功というのではなく、健康な子どもが生まれてこそ成功と考えるべきだということを強調していた。特に **donor conception** をする場合のクリニックやエージェンシーの選択においては、何を成功率といているのかを見極めることが大事で、あわせて、評判、経験、透明性、クリニックとエージェンシーのコミュニケーションの良さ、サポートスタッフの質などに関する情報を集めることが大事だと話した。

第四セッションは、**BabyQest** を創設した **Pamela Hirsch** が、医療費の高いアメリカの現状を反映して行っている活動を紹介した。彼女は、娘が不妊に悩み、はじめてアメリカの不妊治療費

の高さを知り、それをきっかけにさまざまな組織からファンドを得て、それを不妊治療費に苦しむ不妊カップルの支援にあてる HUSH というプログラムを立ちあげ、現在それを実践している。自宅を事務所に活動を展開しており、現在 100% グラントで運営費を賄い、創設 2 年間で 17 件を支援を実施した。現在も 300 件ほどの申し込みがきている。彼女自身にも代理出産で生まれてきた孫が二人いる。

第五セッションは、エイジェンシーの関係者 (Sam Everingham, Kim Hendrix, Hilary Hanafin, がパネリストとなってディスカッションが行われた。intended parents に対して、代理出産前の心構えとして次のような点をあげていたのが印象的だった。①人間なのでミスが起こることもある、リスクを自覚せよ。そのためには、成功例だけでなく、失敗例にも目をそむけるな。正確な情報と関係者のコミュニケーションのよさがなにより大事である。②intended parents も intended surrogate mother も psychological evaluation が重要であり、心理スクリーニングはかかせない。③代理懐胎する女性を絶対に、mother とは言ってはいけない。あくまでも surrogate という立場をはっきりとさせる。④Legal parentage をはっきりさせておくことが必要。法的な準備は欠かせない。

第六セッションでは、元は養子の分野で法的な支援をしてきた弁護士二人 (Lesla Slaughter, John Chally) が代理出産にかかわる法的な準備の必要性について発言した。代理母を利用する場合のポイントとして、特に海外でこうした技術を利用した場合には法律が異なるために、事前に子どもの親権の取り方や、子どもをどうやって米国に連れて帰るか (移民させるか) などを把握しておくことが大事だといった。そしてエイジェンシーや reproductive attorney (生殖医療関連問題専門弁護士) を使わなかったために、法的な準備が不十分で、問題が起きた例なども紹介した。また、アメリカでは同性カップルやシングルピアレントが代理出産を利用することもあるため、その場合の法的な扱いについても説明があった。

第 7 セッションと第 8 セッションは、卵子提供にフォーカスしたセッションだった。まず、ドナーの選択についてで、卵子提供で子どもをもった女性、Marna Gatlin のプレゼンテーションがあり、Donor conception において、特にドナーの fertility counseling や genetic counselor による心理スクリーニングが何より重要性だと話していた。また生まれてきた子どもとは、たとえ生物学的なつながりはなくても、一緒に暮らすなかで本当の親子になっていくと言うことを自分の経験から語った。エイジェンシーには、細かいことまでも色々質問し、それにきちんと迅速にこたえてくれるところを選ぶべきだと主張した。彼女自身、現在は Parents Via Egg Donation というコーディネイト機関をつくっている。

第 8 セッションでは、同じく egg donor agency の関係者として、Robin Newman と Carrie Bloedorn がパネリストとなり、卵子提供の問題を提示した。Robin は、南アフリカ、バラバドス、カナダ、インド、ギリシャ、ポーランド、米国など 18 カ国で卵子提供プログラムを展開。Carrie Bloedorn は自身も 2004 年から 2008 年にかけて、6 カップルに卵提供をした経験があり、2006 年に Eggspecting Inc. を設立、主にインド、タイ、メキシコで卵子提供のコーディネイトをしてきた。海外での卵子提供プログラムでは、intended parents の 90% がシングルか同性のカッ

プルということである。また海外では匿名が一般的であるが、ドナー自身が気にしないならば、ドナー情報をできるだけレシピエントに伝える方がいいと言っていた。また、海外ではドナーの心理スクリーニングは一般的ではないが、すべてのドナーに心理スクリーニングが必要であるというのがパネリストたちの共通する考えだった。

第 9、10 セッションは、心理専門家による報告で、Kim Bergman は、代理母となることを希望する女性の心理スクリーニングについて話した。彼女自身もレズビアンで、パートナーとの間にティーンエイジャーの娘が二人いる。大事なのは *intended parents*、代理母、ドナーがそれぞれが透明性の高い情報を得られる環境であるといった。またドナーのスクリーニングに時間がかかることもあるが、それでも彼女たちの心理的なバックグラウンドを知ることは不可欠であるといった。ドナー候補者や代理母候補者の 1%か 2%は、スクリーニングに 6 カ月かかることもあるらしい。また代理母については、代理妊娠・出産について、自分が 9 か月のベビーシッター (*babysitting for nine months*) になると割り切れる成熟した女性でなくてはならないと話した。

第 10 セッションの Hilary Hanafin も、同様に心理カウンセリングの重要性を強調し、代理懐胎においては代理母の人間性を考慮する必要があるといった。また、海外で代理出産などをする場合には、依頼者と代理母の出身国の文化の違いなどによる心理的な影響に十分に配慮することも必要だと言及した。依頼者に対する心理カウンセリングでは、「生まれた子が将来、ドナーになりたいとか代理母になりたいといったら、どう対応するか」という質問をして、代理出産や配偶子の提供についてどのように考えているかを判断することもあると言った。

また、アメリカでは最近、*high school* や *middle school* の *genetical class* や *biology class* で、DNA テストを自分たちでやってみようなどところもあるらしく、子どもが親と生物学的なつながりがない場合にも、それを隠すことはむずかしくなっている。そこで、第三者のかかわる生殖医療を利用する場合でも、子どもが事実を知ることを前提に、技術を受ける前に、以下のことをあらかじめ考えておく必要があると、以下のようなポイントを提示した。①What story will you tell the children? ②How will your choices reflect on them?③What will the other people say about you?④Who will control the access to the information?④Who will tell the story to the children and others?⑤What do you all agree to not share or reveal?

第 11 セッションは、インドのクリニックの懐胎にかかわっている医師と、インドで代理母をコーディネータしている女性とスカイプを通してディスカッションが行われた。会場から、「なぜインドでは代理母の妊娠期間、家族と離れて暮さなければいけないのか？」という質問に対して、「家庭にいるよりも、病院にいるほうが女性はゆっくりでき、妊娠中に緊急事態が起こった場合もすぐに問題に対処できるから」と答えていたが、私個人としては、それ以外の理由もあるのではないかと考えた。たとえば周囲に対して、代理母をしていることを隠す意図もあるかもしれないが、そうしたネガティブな側面についてはまったく語られなかった。さらに、インドにおいてもドナーや代理母候補者のスクリーニングを重要視していると語っていたが、米国の心理スクリーニングを重視するのとは異なって、HIV などの *transmitted disease* のスクリーニングを重視しているという点が興味深かった。インドでは子どもが生まれたら、代理

母に生まれた子を見せる前に **intended parents** に渡すことがほとんどらしい。代理母の心理に対するケアなどが、インドではまだ不十分なのではないかという印象を受けた。

第 12 セッションは、メキシコやタイでの代理出産をコーディネートしているエイジェンシーの代表 3 名 (**Marysol Moreles, Catherine Moscarello, Tamara Barkalai**) による報告だったが、各国での代理出産にかかる費用 (**Mexico-40000~50000 ドル、タイ-85000 ドル**) など、非常に表面的な説明が多かった。これまでに起こった問題について会場から質問が出たが、それに対してはあいまいにしか答えなかった。メキシコはカソリックの人が多いが、出生前検査で胎児にダウン症がある場合には、中絶も合法的にできるらしい。

第 13 セッションは、代理母となった 3 人の女性が自分の経験について語った。一人目のパネリストの **Carol Jackson** は、2 度、代理出産をした経験があり、18 年前の最初の代理出産では、人工授精型で男の子を出産した。2 回目は IVF 型の代理出産で、双子の女の子を出産、その双子も今年 15 歳になった。代理出産で最も不安だった点は、具体的な治療のプロセスや、注射や薬による影響などもこわかった。**Carol** は自分の経験を生かし、現在、**Center for Surrogate Parenting, Inc.** で、**surrogate case manager** をしている。二人目のパネリストの **Jamie Canevari** は、現在、代理母として妊娠中で、大きなお腹をかかえての参加だった。自身も 3 人の子どもを持ち、正規の仕事も持っているが、妊娠することが好きで、国内、海外の不妊カップルのために代理母となったという。1 回目はゲイのカップルのために個人的に代理出産したが、2 回目はエイジェンシーを通して、今、代理懐胎している。生まれた子には、みんなの協力で生まれてきた、あなたは特別であり、私はあなたのお母さんではないということを伝えたいと話していた。三人目のパネリストの **Kelly Tharp-Rummelhart** は、3 回、IVF 型で代理懐胎で子どもを出産している。彼女はそれぞれの家族と今もつきあいがあり、その様子は彼女のブログでみることができる。(justthestork.bolgspot.com)

全体を通して印象的なのは、彼女たちが経済的な理由で(貧しさゆえに)代理母をしているわけではないという点で、彼女たちにとっては社会貢献の一つの形をとっているように見えた。したがって、出産後も金銭的な報酬ではなくて、「ありがとう」と言われることに価値を置いており、子どもや依頼者夫婦と駐車場で「さよなら」といっておしまいにするのではなく、産んでしまっただけでも何かの形でコミュニケーションをとることを望んでいるということがわかった。

**Gay Family Journeys** と **Hetero family journeys** のセッションは、当事者のためのものなので、参加しなかった。

第 14 セッションでは、**Family therapist** である **Carole Leber Wilkins** が、子どもに事実を知らせることの重要性を、**DI(AID)** の事例を紹介しながら説明した。彼女は、子どもが幼いうちに真実について少しずつ話し始めることを勧めていた。

そして最後の第 15 セッションでは、代理出産で生まれてきた人が二人、自分の経験について語った。一人目は Malina Simard-Halm という 18 歳の女性で、ニューメキシコのサンタフェに暮らし、ゲイのカップルを父親を持つ。彼女には弟が 2 人おり、この二人も代理出産で生まれ、3 人は、提供卵子と父親の精子で生まれた。2014 年秋から、彼女はエール大学への進学も決定していて、聡明で魅力的な女性だった。彼女の語りでは、彼女は 18 年前、はじめて Gay couple に生まれた子だったそうであり、小学生や中学生の頃は、ゲイの父親を持つことがはずかしく、隠そうとしていたそうである。しかし、今はこれが自分たちにとっての家族の形で普通であるし、父親たちは自分たちを大事にしてくれて、自分は幸せだと感じていると言っていた。また自分たちが幸せにならないと、代理出産はいけないというイメージを世の中に植え付けることになるため、自分たちが幸せになり、こうした家族の形があることを多くの人に知ってもらうことが、自分たちの役目だとも語っていた。彼女のこの話には、多くの人が共感しているようだった。これを聞いていた、Malina の父親も一言コメントを述べ、こうした子どもを持てたことを誇りに思うし、自分たちの選択はまちがっていなかったと確信していると話したのが印象的だった。Malina たちは代理母が誰かは知っているが、egg donor については知らない。ドナーの遺伝的な背景を知りたいと思うことはあると話していた。また他の子どもたちから、たまに代理出産のことを尋ねられるが、生殖医療をよく知らないために、妙な誤解をしていることが多く、そうした子にはきちんと説明すると話していた。

二人目の代理出産で生まれた人は、21 歳の David Levine という男性で、人工授精型の代理出産でうまれてきた。彼には妹もいるが、この妹も人工授精型の代理出産で彼と同じ代理母から生まれてきた。彼らの代理母は、彼らを含め、6 人の子どもを代理出産していて、彼らはその代理母と会ったこともある。David の母親は 21 歳のときに癌になり、生殖機能を失った。母親とは生物学的なつながりはないが、一緒に暮らしているので、それでも親子であるし、あまり代理母に特別な思いはないと彼は述べていた。ただ、妹のほうは、女性ということもあって、妊娠中のことや、体質などを知りたいようだ。彼の母親も、David の後に短いコメントを述べ、「私は子どもたちとは血がつながっていないけれど、家族になるのに遺伝的なつながりは問題ではなく、親子関係には愛が重要で、それは一緒に暮らす中で生まれ、家族というのはそうした中でつくりあげていくものだ」ということばが印象的だった。

最後に conference でブースを出していた組織・団体を以下に示す。

- My Donor Cycle (egg donor agency) San Carlos office • San Diego Office 800-264-9625
- California Fertility Partners (Clinic in LA) [www.californiafertilitypartners.com](http://www.californiafertilitypartners.com)
- The Fertility Law Firm [TheFertilityLawFirm.com](http://TheFertilityLawFirm.com)
- Preferred American Egg donor Agency, Eggspecting Inc. [www.eggspecting.com](http://www.eggspecting.com)
- Baby Quest Foundation Inc. (Granting Financial Assistance for Infertility Treatments)  
[www.babyquestfoundation.org](http://www.babyquestfoundation.org)
- The Fertilit Center of Las Vegas (fertility clinic) [www.fertilitycenterlv.com](http://www.fertilitycenterlv.com)
- NW Surrogacy Center, LLC [www.nwsurrogacycenter.com](http://www.nwsurrogacycenter.com)
- The British Surrogacy Centre [www.BSC-America.com](http://www.BSC-America.com)
- DNA Paternity Testing (chromosomal lab) [www.chromosomal-labs.com](http://www.chromosomal-labs.com)

- Bode Technology (chromosomal lab) 877-434-0292(from US), 1-623-434-0292 (International call)
- SurrogateRN (Surrogate Resource Network) SurrogateRn.com
- Fertility Miracles (A division of American Fertility Institute, LLC) www.fertilitymiracles.com
- GIFT Gyno IVF Center (Surrogacy coordinate center in India) www.gynoivf.com (or) www.giftivf.com
- New Life Global Network (surrogacy overseas coordinate agency)  
www.newlifemexico.net or [www.newlifethailand.net](http://www.newlifethailand.net)

